

不妊に直面した夫婦のカップルコミュニケーションがもたらす夫婦関係  
 子どもができず子どもがいない女性と、  
 子どもができず後に養親となった夫婦の語りから

立命館大学応用人間科学研究科  
 臨床心理学領域  
 中村 昌美

不妊という事態において、夫婦がどのように問題に取り組むのか。また取り組み方によって出てくる、その先の違いを検証するため、研究 1 では「子どもができず子どもがいない女性」を対象とした。5 名の女性協力者が得られた。研究 2 では「子どもができず後に養親となった夫婦」を対象とし、5 名の女性と 2 名の男性協力者が得られた。研究 3 とも半構造化インタビューを実施し、KJ 法にて分析した。

研究 1 の語りデータをカテゴリー化すると、18 に分類でき、不妊プロセスのカテゴリーとして 5 つに分類できた。【1】家族イメージ、【2】女性の不妊経験の特徴、【3】共感しないと感じる夫への不満、【4】夫婦のコミュニケーション不全の相互作用、【5】コミュニケーションの不全から生じる現在の思い、であった。【2】女性の不妊経験の特徴は、(1)産む年齢のリミット、(2)不妊治療の身体的、精神的負担、(3)「産む性」としてのアイデンティティの危機、に分類できた。また、(3)「産む性」としてのアイデンティティの危機は、周囲からのプレッシャーと自己のジェンダー意識、他人との比較による逸脱感、女性性の否定の繰り返し、子どもや家族という関係性を重んじる女性、子どもを産めないことへの否認、現状適応のため工夫して作られ始める「産まないアイデンティティ」、に分類できた。【4】夫婦のコミュニケーション不全の相互作用は、妻による夫への言語的・非言語的プレッシャー、黙る夫、話し合えない夫婦、に分類できた。

研究 2 では、同じく 17 に分類でき、不妊プロセスのカテゴリーとして 7 つに分類できた。プロセスカテゴリー【1】【2】は研究 1 と同じ、【3】不妊治療中の夫への不満、【4】夫婦の良好なコミュニケーションの相互作用、【5】子どもが欲しい理由の自己洞察と気づき、【6】産むことから育てることへの切り替え、【7】養子は産めなかった代わりではない、であった。【4】夫婦の良好なコミュニケーションの相互作用は、相手を責めない態度、話し合う夫婦、配偶者への配慮、理解しよう、変わろうとする態度、に分類できた。

【1】家族イメージ、【2】女性の不妊経験の特徴は、研究 3 の協力者とも同じであり、不妊経験を積むことで、男性に比べ女性が心理的に追い詰められ、夫への不満が生じていた。しかし、夫婦コミュニケーションのあり方とその相互作用によって、後の夫婦関係が研究 1 と 2 の協力者では違っていた。不妊治療を含め、「子どもをもつということはどうしていくのか」という問題を、夫婦がどのように取り組んだかによる、その後の夫婦関係の違いが明らかとなった。不妊は、女性の産むアイデンティティの危機であり、夫婦の危機ではあるが、夫婦を脅かす出来事であるのか、取り組んで新たにやっけていく出来事であるのかは、夫婦の取り組み方しだいといえた。

キー・ワード：不妊，カップルコミュニケーション，問題の取り組み方